

KAL007 便、アメリカ第 7 艦隊、そして大口シアの策略

1-蜃気楼

1983年10月17日

アメリカ第 7 艦隊機動部隊 71 の新司令官はモネロン島の方向の暗闇をはるかに見つめながら、ブリッジの上に立っていた。海軍少将のウィリアム・コッケルは機動部隊の指揮と捜索救助任務を解かれた所だった。現在、捜索救助任務は、捜索引き揚げに再分類されている（9月10日の現在）-大韓航空機 007 便の生存者がいるという全ての望みは消え去っていった。彼、ウォルター・T・ピオッティ・ジュニア海軍少将が現在指揮をとっていた。



海軍少将ウォルター・T・ピオッティジュニア

9月1日、大韓航空機007便はアラスカのアンカレッジを出発し、カムチャツカ半島と機密の軍の補給基地を越えて、ソビエト領内に深く迷い込んでしまった。それから、大韓航空機は、オホーツク海の上空を越え、サハリン島上空のロシアの作戦空域-シベリアからまさにタルタル海峡を横切っていた-を離れようとしていた時、撃ち落とされた。今、ソビエト軍と「彼ら」は競って、飛行機の操縦室の声の録音機とデジタル飛行情報録音機である「ブラックボックス」を一番、最初に奪回しようと（そして唯一の者になろうと）していた。これらの物は、KAL007便はアメリカのスパイ任務についていたという告発を確認または論破する証拠を提示すると期待されていた。

「彼ら」とは、アメリカ合衆国、日本と韓国のことであった。墜落の後すぐに、KAL007便の所有者である韓国はアメリカと日本を捜索引き揚げ作戦のための工作部隊として指名した。この事はソビエトの引き上げが違法であり、そしてもしソビエトが実際、サハリンと小さいモネロン島の周りを離れて-彼ら自身の領海の外側で引き揚げ作業を企てるなら、アメリカにソビエトに対して軍事力を行使することを許すことを意味していた。

ピオッティ司令官はこの事柄に関して一心に考え込んだ。ソビエトの日本大使であるウラジミル・パブロフはまず間違いなく確実な墜落位置の座標を教えていた。機動部隊71は今、それらの座標の中で捜索を行っていた-モネロン島の北北西に近い公海水域225マイルから成る領域。しかし、なぜソビエト軍は自身の領海内で捜索のほとんどをやっていたのか？

ピオッティ司令官の視界の遥か向こうに、けれどもモネロン島の方向に、主要な

ソビエトの引き揚げ船、ミハイル・ミルチンクがあった。SPDと呼ばれる、自走式訓練用艦艇のミルチンクはスウェーデン製の、ジャイロスタビライザーのおかげで、風や波に関係なく1つの場所に渡って自身を安定させることができる大きな強みを持っている船であった。



ミハイル・ミルチンク

ピオッティ司令官はミルチンクがモネロン島の北、約11航海マイルのソビエトの水域内に位置していて、ミルチンクの甲板から19の潜水作業が行われていたことを知っていた。彼はミルチンクを離れて作業している潜水夫が、撃墜の後すぐに深海作業指示によって、ヘリコプターによってロシアの北西にあるコラ半島のムルマンスクの岸から飛び去り、そしてそれから輸送機によって「007便」任務の割り当てのためにサハリン島のコルムスクの港に移動した事を知らなかった。

彼は水中作業士と多目的の搜索、漁船にも気付いていて、それは2つの2人用の潜水艇、ティンク2とオケアノログの母船だった。彼はその潜水夫がまた、この時

ウクライナの黒海海岸のクリミア半島のセベスタポールから、急いで飛び去った事を知らなかった。そして彼は2つの有人の、2つの無人の潜水艇を持ったゲオルギ・コズミンに気付いていた。彼は、ゲオルギ・コズミンの潜水夫がソビエトの、サハリンからタタール海峡を横切る主要な海軍の港のガバンから来ていて、そして全てのこれらの潜水夫は別々に作業している水兵で、ほとんど、2つの民間グループに優先して作業をしていた事を知らなかった。彼は知っていたら、軍と民間の潜水夫の間で、時間と場所が離れていた理由を十分、熟考していただろう。彼はソビエトのそれぞれの作戦の性質を熟考していただろう。



ゲオルギ・コズミン

今は機密扱いではない、1983年11月18日付けの「水上戦闘艦集団-第7艦隊機動部隊の007便に関する交戦後報告」において、ピオッティ司令官はソ

ビエトの捜索引き揚げ作戦を要約している。

「KAL 0 0 7 便撃墜の6日以内に、ソビエト軍は墜落位置の全地域に6隻の艦艇を展開させました。アメリカ海軍部隊が観察していた次の8週間に渡って、この数は捜索引き揚げ (SAS) 地域で1日平均、19のソビエト海軍の、また海軍に関連した、そして商業上の (しかし疑いなく海軍に従属した) 船舶数に増えました。この期間に渡る、SASのソビエト船舶の数は最低6隻から最高32隻に及び、少なくとも他に40の違う船舶種類から成る48の違う船舶を含んでいました。」

全く！これはぞっとするような海軍の武装配置でした。



アメリカ合衆国沿岸警備艇[USCG]モンロー (公式のUSCG写真)

アメリカ側においては、SAS船舶に関する限り、3隻のアメリカ船舶がいました—沿岸警備船モンロー、救助引き揚げUSS (米国艦船) コンサーバー、そして艦隊曳航船アメリカ海軍船舶ナランガセット。また、アメリカ海軍極東引き揚げ契約者 (Selco) によって用船契約をしていた3隻の日本曳航船がいました—海洋牛、かいこう丸7、そして不運なかいこう丸3。

航行システム機器を含んだこれらの船舶には、大韓航空機007便の残骸のような、深海にある物体を探知するように設計されたサイドスキャンソナーを引き揚げる割り当てがありました。それらはまた、サイドスキャナーが探知した物ならなんでも調査するよう設計された無人の「深海無線操縦機」の発射台として機能していました。そしてそれからKAL007便の「ブラックボックス」から出されたピーンと音が出るシグナルを拾える、極めて重要な「波動音発振装置」位置表示がありました。このシグナルは30日間持続できたのです。

これらのSAS船舶は別にして、アメリカ海軍戦闘部隊と後方支援船がいました。—USS (アメリカ船舶) エリオット、USSバドガー、USSステット、USSハツサヤンパ、USSカラガン、USSブルーク、USSメーヤーコード、USSタワー、USSスタークそしてUSSウィチタ。これらの船舶に付け加えて、数多くの日本の海上保安部(JMSA)巡視船と韓国の船舶がいました。

ピオッティ司令官の、海軍が引き受けた膨大な仕事に関する評価「パルマレス沖で失われた水素爆弾の捜索以来、スペインはアメリカ海軍にその重要な捜索努力または、KAL007便の残骸の重要な捜索活動を引き受けさせませんでした。」

しかし、事は悪い方向に進んでいました。ソビエト軍とアメリカ軍の直面が起こり、脅威は行動に変わり、武器は相手に合わせられ、照準が合わされ、核の恐怖が現実になろうとして、当りを包み込んでいた—KAL007便とその「ブラックボックス」を目指して！



ソビエトの飛行機が、ソビエト軍が韓国の旅客機を撃墜した側にいたアメリカの駆逐艦を監視する

出来事の次第(1)

9月7日 USS エリオットのヘリコプターがソビエトの航空機によって急襲される

9月15日 USNS (アメリカ海軍船舶) ナランガセットはソビエト船舶アルピニストによる危険な演習を報告する。

9月18日 ナランガセットがペグスによって急襲される

9月19日 USNS コンサーバーの作戦がガブリル・サリチェフの干渉に会う。
USS ステットレットがペグスの干渉に会う

(1)海上における冷戦、デービッド・F・ウインクラー、アメリカ海軍研究所出版部、
2000年6月、47ページ

9月23日-USSカラガンとガブリル・サリチェフがもう少しで衝突しそうになる

9月27日 カシン級駆逐艦NO660がアメリカ海軍のヘリコプターの飛行を妨げる。アメリカ海軍の船舶がカラ級巡洋艦ペトロパブロフスクとカシン級駆逐艦オダレンニーによってレーダーロックオンをされる

10月26日 ソビエトの戦闘部隊がUSSタワーとコンサーバーの前で、縦横に動く

ピオッティ司令官は以下の通り、ソビエト軍の刺激的で、障害になる危険な活動を描写する。

「・・・ 搜索センサーを引っ張る船舶が、うまく計画的に搜索軌道を通るのを妨げた機動演習、引っ張られたセンサーの中央部または深海無線操縦無人機を切断し、もつれさせるのに相当な潜在力を持つ機動演習、そして船長が危険に会う衝突または係留船が損傷を受けると（いくつかの場合において起こりました）思っていた、停泊していた日本のチャーター船舶に対して極端に接近した機動演習。きっと、ソビエト軍はその時、わざと日本のチャーター船舶の船長を苦しめ、おびえさせようと努めていただろうし、その事は記憶に留められる物です。」

「・・・ 衝突する危険の回避を含んだ、日本船に接近した護衛[アメリカ戦闘部隊

による]は、攻撃される位置と考えた所に留まる代わりに、係留船の錨を2回放った丸NR3の第一船長に対してのソビエトの脅しを防ぐのに、十分ではなかった。」

1991年の外交委員会に関する共和党局員の論文は、ピオッティ司令官のリストに付け加え、さらに詳細を語る。

その上、ソビエト海軍と補助艦船は1972年の海事協定付帯条件に対して数多くの重大な違反を犯した・・・何隻かのアメリカと同盟国の艦船とのソビエトの衝突未遂、偽の国旗とでっちあげた光信号を提示したり、武器のレーダー誘導の照準を合わせたり、アメリカによってチャーターされた日本の補助艦船に乗り込むと脅す武装部隊を送ったり・・・彼らはモネロン島の北西で海軍の実弾発射演習を行い、そしてアメリカ海軍の搜索機動部隊を脅す空対艦核ミサイルを備えたバックファイアー爆撃機を送り・・・アメリカのソナーの目印を動かしました・・・アメリカ海軍の、非常に深い公海水域の海底のおとりの「ピンガー」に対しての搜索努力をうまく利用したりしました。」

ピオッティは結論づける

「もし機動部隊71が、自国領域と主張された領海水域からかけられる制限を無視して搜索できたなら、航空機は十分、見つけれただろう。」

「KAL007便の残骸は1つも見つけられなかった・・・しかしながら、残骸、または航空機のいかなる部分も、ソビエトによって自国領域の限界として主張された12海里の区域内にはないという事を、搜索作戦は95パーセントかそれ以上の自信の程度で証明しました。」

2-現実の水面下

(次の項は、2000年フリブリスによって出版された、007便の救出：KAL 007便とその生存者の語られなかった物語の82-92ページからの物です。使用には許可が必要となります。)

下方よりKAL 007便

「撃ち落とされた飛行機がこの時間の間、海に突っ込むのに約10分⁽²⁾かかり、全員ではないにせよ、多くの乗客が救命胴衣を身につけました。・・・さらに、彼らは間違いなくシートベルトを身につけました。・・・どんなに航空機が激しく海面に突っ込もうとも、269人が痕跡なしに消えてしまうのを想像するのは難しい。・・・乗客の何人かは救命胴衣によって丁度海面に投げ出されたに違いない。・・・何人かは席に縛られて、海底に沈んでいっただろう。乗客の全員が消えたはずはない。」

—ジェームズ・オーバーグ 前米国航空宇宙局政府高官、追突分析の専門家

後に起こるボーイング747の爆発と海面への衝突(KAL 007便は、伝えられるところによると最初の爆発した、海面に衝突したボーイング747だった)が示す事を知っても、大したことはなく、そしてKAL 007便は「激変的に」、「壊滅的に」空中で破壊され、そして「くるくる回転し」、「地表の方へ突進し」、「急に向きを変え」、「海面に突進し」そして「常に加速を増加して」⁽³⁾悲劇へ「急降下した」

と多くの時事問題解説者は確信し、269人の一団は、[水面下の墓である]KAL 007便の胴体の一部または各部分に閉じ込められて発見されただろうと結論づけた。

(2)ソビエト / 日本のレーダー追跡によると少なくとも12分

(3)KAL 007便の攻撃された後の飛行についての、しばしば繰り返されて言われる有名なマスコミの描写。そのような描写に関して、マスコミの最初の傾向を知るには、付属のAを見てください。

それから爆弾が爆発したが、いわばテロリストの爆弾が、爆弾班の遠隔操作の鋼鉄のあごのある容器の中で時間前に爆発する時に、威力が弱められる様に、ほとんど音も聞こえなく威力は弱まっていった。その爆弾は、1990年12月から1991年6月までのソビエトの新聞イズベスチヤのKAL 007便を取り扱ったテーマで発表された一部のインタビュー、一部の分析記事に出てきました。・爆弾が爆発したために鈍くなって、弱くなった容器によって、研究者とマスコミ機関はすぐに、これらの記事は共産党政権の抑圧された機関によって発行されたという事がわかり、そして偽情報の流すためにソビエトによって使用されてという事が分かった。・出来事を追っていたマスコミ機関等はすぐに興味を失いました。

偽情報の特質は真実を語る事です-しかし、表面的ではない真実の十分な、またはそれ以上の脅威を与える方法で。・嘘は副次的な物である。・しかし、モネロン島のどこかの、サハリン島の海岸を離れた水面下で、詳細な真実は明らかにされるのを待っています。

3つの潜水グループが記録されていますが、他の複数のグループも含まれていたという指摘もあります。記録された3つのグループの最初のものは、サハリン島からタタール海峡を横切った、シベリア海岸のソビエトガバンの海軍機動部隊に任命された軍の潜水夫たちでした。これらの海軍の潜水夫たちは、母船のゲオルギ・コズミンから、2つの有人と2つの無人の潜水艇を操作していました。

2番目に、石油掘削船のミハイル・ミルチンクの作業をしているムルマンスクのグループがありました。ミルチンクは自分の位置を調整し、それから錨の使用なしに変化する風と水位の状況に関係なく、位置を強力に安定させることができる非常なメリットを持ったスウェーデン製の船でした。この船は、撃墜されて、沈み、そして爆発した航空機のだいたいの墜落中心位置から、破片を奪回するのに非常に重要でした。

3番目のグループは、多目的捜索を行っている、漁船のハイドロノートで作業をしているスベスタポールのグループでした。ハイドロノートは2つの小さい2人乗りの潜水艇、ティンク2とオケアノログの母船でした。ミハイル・イゴレビッチ・ギルスは、スベスタポールの潜水夫によって最も広く使用された潜水艇のティンク2の設計技師で、機長でした。オケアノログはたった2回の潜水しかしませんでした。

ソビエト太平洋艦隊の司令官である艦隊司令官のウラジミル・バシリエビッチ・シドロフは、直接の指揮下の軍の潜水夫と同じく民間の潜水夫を伴い、ソビエトの引き揚げ作戦を指揮していました。ムルマンスクのグループに属しているが、スベスタポールのチームにも含まれていた潜水夫長は、ウラジミル・バシリエビッチ・ザカルチェンコ⁽⁴⁾でした。彼は潜水活動期間を記録していました。

軍の潜水夫が降下し始めてから少し経って、スベスタポールのグループは9月15日に潜水を開始しました。軍が民間のグループよりどのくらい早く作業を始めた

かという事は知られていません—すなわち、イズベスチヤのシリーズが関する限り、知られていない。しかしながら、ソビエトのイスラエルと他の国への移民の報告によると、CIAの報告 / 共和党局員の論文の中で参照されてありますが、KAL007便がソビエトのモネロン島の側の領海に引いていかれ、そして故意にソビエトの領域の境界線の中の浅瀬に沈められたのは(5)、撃墜されて—KGBのロマネンコ將軍指揮下のソビエトの沿岸警備隊の船舶が乗客と荷物を連れ去った後—すぐの事でした。それゆえ、ソビエトの軍の潜水夫が9月1日、まさにKAL007便が撃墜されたその日に、潜水を開始したのは可能だったでしょう。

民間の潜水夫たちは、軍の潜水夫たちが自分より優先権を与えられていたのを知っていて、彼ら(民間の潜水夫)はより優れた装備のために呼ばれたのだという事を理解したかまたは理解させられました。

極東深海掘削行政部長で、前KAL007便「ムルマンスクグループ」の潜水夫であるA.S.トルチノフはそれを述べて、「潜水夫については、軍はもちろん自身の水面下救助活動団体を持っています。ですが、その最高潜水深度は160メートルです。軍の装備を持ってして、15-20分以上水中にいる事はできません。そして、あらゆる事から考えて作業は長時間を要します。」

(4)ウラジミル・バシリエビッチ・ザカルチェンコ。艦隊司令官のウラジミル・バシリエビッチ・シドロフと混同しない様に。

(5)CIA報告 / 共和党局員の報告 75ページ

「なので、彼らは自身の軍では仕事ができないと判断して、軍部は搜索地域に派遣できるあらゆる人を補充し始めました。」軍の潜水夫が十分な装備を持っていないので、民間の潜水夫が呼ばれたという説明は、多くの国の軍が、深海の搜索引き揚げという比較的まれな出来事に十分な人的労働力と財政に投資していないので、表面上は妥当に思えます。例えば、イスラエルは1999年4月に長形の、失踪した潜水艦「ダカール」の位置を突き止めるのに成功した、アメリカの会社「ノーティカス」を雇い、もう一度、2000年3月28日にアトリットの西30キロメートルの地中海の真下で墜落し、沈んだF-16の残骸と「ブラックボックス」の位置を探し出すのにノーティカスの助力を仰ぎました。この民間の会社のノーティカスは今までの所、世界の様々な軍隊の総計20機のF-14、F-15とF-16の位置を突き止めてきました。

けれども、どんなに説明が妥当である様に見えても、KAL007便に関わっているソビエトの民間の潜水夫の報告は、軍の装備は実際、任務に十分であることを示しています。しかし、軍の潜水夫が達成したあの任務は、民間の乗組員に割り当てられた任務以外の物でした。軍の船舶-と軍に徴発された民間の船舶-の任務は奇妙な物で、それは何よりもまず、撃墜された航空機を引いていき、沈め、そしてそれから今沈められた航空機を爆発させ、空中爆発(民間の潜水夫はそれを証明し、裏付けるために呼ばれた)をシミュレートするためにその残骸を四方に散らした程奇妙だったと、次のソビエトの民間の潜水夫は証言しています。それで、ソビエト連邦は罪を負う事を免れようとしていました。

そして軍と民間の潜水夫が見つけた主要な物は以下の通りです。目撃されて、軍の潜水夫に搜索された航空機は基本的に、欠ける所がなく、この航空機が後で民間

の潜水夫に立ち入られた時以上に完全な1つの物体で-構造上傷のない物でした-。軍の潜水夫によって「入れる物」として描写された飛行機は、潜水艇ティンク2の司令官で、機長のミハイル・イゴレビッチ・ギルスが疑った民間の潜水夫によって後で目撃された飛行機とあまりにも一致していませんでした。(6)

「それは私たちが軍の潜水夫たちに会った交代の中での事でした。」

『ギルス機長の日記の最初の部分「その日の内に、救助の潜水夫と何時間か一緒になりました。彼らは沢山の物が何であるか明らかにしましたが、それはまるで私たちの仕事がまだ終わっていないかの様に見えるのです。彼らは後部により近い胴体を見つけました。そしてそこには多くの残骸物があります。それは岩礁の間に垂直に立っていました。彼らは最初にそれを引き下ろし、それから中に入っていました。」』

(6) 1991年5月28日のイズベスチヤの8ページ

「正直に言いますと、」ミハイル・イゴレビッチは続ける。「私は完全には彼らを信じていませんでした。彼らによれば、彼らは直立に立っていた飛行機の後方部分を見つけました。しかし、これはとても大きなボーイングの断片です。それを岩礁の中で見つけたと言っていました。私も岩礁に行ってみましたが、そこで私も小さい断片だけを見ました。-ですがそれは至る所にありました。私が出くわした最も大きな部品は、主脚部、車輪、エンジンと航空機の機体でした。」

それにも関わらず、サハリン島のソコル空軍基地で高級将校に質問した時、広報のアンドレイ・イツレッシュは、最初、KAL007便は登れる程、完全な状態だったという確認を私に与えました。

「特殊技官-海軍の-は日本海で巨大な航空機を見つけました。付け加えると、潜水夫(軍も)は海底に行き、KAL007便の先端から尾翼まで、全面によじ上っ

ていきました。」(7)

軍と民間の潜水活動は全く重ならなりませんでした。軍の潜水夫が作業を終えると、民間の潜水夫が作業を始めたのです。最初の潜水する民間の潜水夫はスベスタポールのグループからでした。

「スベスタポールの人たちは、もう既に日本海の海底で作業をしていたと私たちに語ってくれました。それに加えて、彼らはムルマンスクのグループさえよりも早かったのです。」(8)

潜水夫のビヤチエスラフ・ポポフは私たちにその前に行われた軍の作業を教えてください、そして驚きながら、現在進行中のどんでん返しを教えてください。-起こるべきではなかったどんでん返しを。

(7) 1990年12月21日のイズベスチヤの12ページ

(8) 1991年5月27日のイズベスチヤの6ページ

「最初の潜水は航空機が撃墜された2週間後の9月15日でした。私たちがその時覚えている限りでは、私たちの前で、トロール漁船が示された象限(平面上で、直交する座標軸が平面を四つに分けた、それぞれの部分)でいくつかの「作業」をし

ていました。軍が、徹底的に調べていた作業に何の意味があるのかを理解するのは難しいものです。最初に海底の周りがあるあらゆる物を行き当たりばっかりに、広く探して引きずり、そして潜水艇に運んでいるのか？物事がその事と逆の命令で為されるべきであったのは、明らかです。」(9)

しかし、このどんでん返しによって、KAL 0 0 7 便の最後の機能停止の場所は、もともとの着水した場所ではないという事、しかし、海中に浮かんでいる間に、もともとの着水した場所から引いていかれ、それから沈められ、(そして爆破された)そして、飛行機が地表に向けて突進したので、分解した飛行機がその部品をまき散らしたと見えるために、その残骸がまき散らされたという論点があるのです。ギルス機長はKAL 0 0 7 便の次の置かされた場所について、この全体的な印象を持っています。

「私が持った印象は、空から落ちてきた代わりに、KAL 0 0 7 便の全てがトロール網によってここに引いてこられたという事です。」(10)

9月の終わりまでに、たぶんサハリン島沖のモネロン島の東に配置され、作業をしていたソビエトの掘削船、ミハイル・ミルチンクはモネロン島の北に位置していました。全ての民間の潜水グループは、ボーイング747の残骸と破片を検査し、その写真を撮り、そして修復作業に当たっていました。269人の運命に対しての全き理解のためには、これらの潜水夫が見た事と同時に重要な事は-彼らが見なかつた事に対して深い知識と正しい理解が必要です。潜水夫の、海面下経験に対する反応は、等しく有益でした。そしてそれは潜水夫の期待と、彼らを海面下の任務につかせた人たちの願望を明らかにしています。これらの理由で、イズベスチャで報告された通り、彼らの描写と水中環境における経験を聞くのが一番です。

ビヤチェスラフ・ポポフ

「私たちが海底に何の死体も見つけない時、非常な安堵感を覚えました。死体だけではなく、スーツケースも、大きなバッグもです。時々、こんな考えさえ浮かびました。これは本当に乗客機だったのだろうか、それともこの事は、欺きなのか？私は私たちがこの独自の意見を集約したのを覚えています。(私たちは何とかして

自分たちにこの状況を説明しなければならなかったのです)彼ら(大韓航空機の乗客)にはそこを離れたどこかで、特定のボーイングで事故が起きた。しかし、この偽造でその事故を隠したのだ-このスパイの飛行機を」(11)

(9)同じ箇所

(10)1991年5月28日のイズベスチヤの8ページ

(11)1991年5月27日のイズベスチヤの6ページ

ウラジミール・ボンダレフ

「私はこの人間の手を発見しました。」彼は恐ろしい写真を私たち{イズベスチヤのリポーターたち}に差し出します。「第2または第3の潜水の間に-9月17日と20日の間に。私がそれを見た時、私はそれはギプスではない事を確信しました。-私は機長にその部分を拡大してくれる様に頼みました。その事がそれはインチキではない事を確信する唯一の方法だったのです。」(12)

ミハイル・イゴレビッチ・ギルス

『ギルス機長の日記から「10月10日の潜水。航空機の部品、翼桁、航空機の外板の部品、電気系統、そして衣服。しかし、人はいなかった。私の印象は、空から落ちてきた代わりに、KAL007便の全てがトロール網によってここに引いてこられたという事です。』(13)

「そこで私たちは実質上の墓場に出会う事に身構えていたのです。しかし、1つの潜水が行われ、そしたら第2の、そして第3の・・・モネロン島近くでの私たちが行った作業における全体的な、かなり長い間の期間中、私と部下はたぶん10回ぐらい、ボーイングの乗客の死体に出くわしました。 たったそれだけです。」(14)

「その他の物は私たちに説明が付きませんでした。-ファスナーで閉じられている衣服。例えば、コート、ズボン、パンツ、ファスナー付きのセーター-種目は違っていたが、-ファスナーで閉じられていて、中には何もなかった。それで私たちはこの結論に達しました。十中八九、乗客は減圧で飛行機から放り出され、私たち

が破片を見つけた完全に違うそれぞれの場所におのの落ちていった。彼らは広い区域一帯に広がって落ちていった。気流も急激に働いていた。」

(12)同じ箇所

(13)1991年5月28日のイズベスチヤの8ページ

(14)もし、「10回の遭遇」が10の別々の死体を伴うもの、または(十中八九)10回の遭遇が10以下の死体を伴うものかどうか、この証言から確認する術はない。これらの遭遇によって、同じ人からの死体の部分を見たという事は全くあり得る事です。

V.ザカルチェンコ、G.マチエベンコ、V.コンドラバイエフ

「私たちは下に潜水して、墓場を見るのではないかと考えていました。しかし、最初の日も、次の日も、死体はありませんでした・・・私たちは自分の潜水した跡の周りに気遣っていました。そして私が最初に何人かの死体を見た時、驚きましたが、ぎよっとはしませんでした。そしてそれからいくつかの骨を見つけました。2つ・・・私はそれらを手にしました。後で、頭皮のような、毛が生えた人間の皮膚を見ました。髪は黒かった・・・しかし、触れられると、それは全部、ばらばらになりました・・・手袋の中の手と私が思った物を見ました。それから、忘れないでください、私たちはジャケットを着た、頭がない、胴体を見ました。そして彼らの身体を回してみると、ジャケットの下からいくつかの白い紐がありました。-明らかに内蔵の残りです・・・」(15)

「私はたった1回の潜水もし損ないませんでした。非常に明確な印象を持っています。飛行機はがらくたでいっぱいだったけれど、そこには本当に誰もいなかった。なぜか？たいてい、飛行機が墜落する時、小さな物でさえ・・・通例、スーツケースとバッグがあり、または少なくともスーツケースの取手があるものです。」※

V.ザカルチエンコ

「ですが、大事な事は、私たちがそこで見た事ではなく、見なかった事でした。-潜水夫たちは実際、何の人間の身体、または遺体も発見しませんでした。・・・」(16)

「それで、私たちは膝に穴があいたいくつかのスボン、ベルト-これもまた破れている、その他の無傷の色々な物を見つけました。この事は何を語っているのだろうか？この人はたぶんこれらのスボンを着ていた・・・それから私たちはムルマンスクに戻り、新聞を読み始めました。-新聞に書いてある事は特に興味深い物でした。その時、私は思いました-そんな数の人間の死を装う事は不可能だ-彼らの亡くなったことを嘆き悲しんでいる韓国、タイ、アメリカ、台湾の家族の者をまとめるために・・・2人または3人ならでっち上げられるが-200人がそれ以上はできるだろうか？・・・」(17)

※「ワールドワイドイシュー」1991年2月6日号の21ページ

(15)全ての潜水夫の報告で、これは唯一の胴体-つまり身体についての言及です。

(16)同じ箇所 19ページ

(17)同じ箇所 20ページ

「だが、そのボーイングには何の火災もなかったのです-その事は確かです。全ての物は全く灯油でびしょびしょだったけれど、無傷でした。それで・・・あなたはこの捜索隊の隊員でなされた全ての報告を聞いたのです-この航空機には誰もいな

かったというような、これら全てはねつ造だったという。全面的に私も最初、この意見に同意していました。乗客の私物を除いて、ほとんどそこには人がいた事を指し示す痕跡はありませんでした。ですが、乗客の私物があったのです！衣服、人が着ていた衣服から判断すると。なぜ？それが裂かれたからでした。私がそれを見て思ったのは-乗客は破片によって切断されてしまったという事でした。」

「全く、彼らは全然人間を捜していませんでした。彼らは、愛する人たちを失った家族の人たちの涙と呪い以上に恐れていた何かを探していました。・・・」

「全く、誰も私たちに人間の遺体を回収する様にとは指示しませんでした。ただ-部品、テープ、文書、ブラックボックスです。」(18)

この章と先の章で提示された事実に基づくと、私たちはソビエト軍による、KAL 007 便の(19) 269 人の乗客のうちの少なくとも259 人の成功した救出の証拠を今、あげる事ができる。

- ・ KAL 007 便が海面に着水した27分以内に、小さなソビエトの船舶がその場所にいた-シドロフ司令長官
- ・ 全ての周知の乗客機の空中での爆発 / 海への衝突に反して、人間の身体が海面に浮標している所は見つけれなかった。
- ・ 全ての周知の乗客機の空中での爆発 / 海への衝突に反して、スーツケースが海に浮標している所は見つかられなかった。(KAL 007 便は貨物区分に450以上のスーツケースを運んでいただろう)
- ・ 全ての周知の乗客機の空中での爆発 / 海への衝突に反して、そして空中爆発 / 海への衝突によって全体に衝撃が行き巡った事に反して、回収された1020個の種目の内の1つも、KAL 007 便の貨物区分から出てきませんでした。

(18)同じ箇所 21ページ

(19)10人の不釣り合いは、潜水がボーイングの乗客の遺体と遭遇した時、10人の別々の人の遺体との事だったという、予期せぬ可能性を考慮に入れている。

- ・ KAL007便、またはその部分は、軍所属の最初の潜水チームによって、そしてトロール網によって海面下に移動させられ、そして墜落して破片が分散したのをシミュレートするためにまき散らされただろうという証拠もあります。
- ・ 空中での飛行機爆発で被るはずだった事実に反して、回収された飛行機の残骸にも、潜水夫たちによって海面下で目撃された残骸にも、焦げた跡はなかった。
- ・ KAL007便は最初の潜水チームの軍の潜水夫たちによって、海面下で多かれ少なかれ、無傷の状態で見撃された。
- ・ 最初の段階で、軍の潜水夫たちはその胴体を、入る事ができて、「先端から尾翼」まで登る事さえできるほど、無傷な状態であったと描写している。
- ・ その後の段階で、民間の潜水夫たちは、KAL007便は部品と破片にバラバラになっている状態であったと描写している。この事は、もし海面下爆発が起こった場合だけ、起きた事でしょう。(20)
- ・ 潜水夫たちは乗客、または沈んだ飛行機に関連していた人たちの遺体がなかった事を、驚きながら報告している。(しかし、1人の潜水夫は首を切られた胴体を見ている事を報告している-だが一方、多くても10回の身体の肉片と潜水夫が「遭遇」したと、報告の隅々に言及されています。)
- ・ 潜水夫たちは飛行機に搭載されていた、または沈んだ飛行機に関連した荷物がなかった事を、驚きながら報告している。(しかし、1人の潜水夫はいくつかのスーツケースを見ている事を報告している。)
- ・ 何人かの民間の潜水夫たちは、ブラックボックスと電子装備品の位置に関しては指示を受けているのに、乗客の遺体に関しては指示を受けていないと、驚きを隠していない。

- ・ オガルコフ将軍が何年も前、— 1983年9月9日に—KAL007便は、アメリカがスパイ活動のために利己的に用いた、民間の乗客を輸送していた飛行機だったと認めたように、艦隊司令官のシドロフと同様に遺体は見つからなかったというソビエトの潜水夫たちが主張した事は、最初のソビエトの、KAL007便は民間人がいないスパイ機だったという立場を擁護するために、認められなかっただろう。全ての証拠はそれゆえ、乗客の、または沈んだ飛行機に関連した人たちの遺体はなかったというロシアの潜水夫たちの主張の真実さを示しています。

(20)前を見てください。実際ソビエト軍によって引き渡されて、ソビエトの潜水夫たちによって報告された数少ない、小さな破片と、そして何人かの潜水夫とイズベスチヤに対して軍が与えた報告通り、人が入る事ができた基本的に無傷な航空機との間の食い違いは、本当に際立つ物です。

* * *

「そういう訳で、ソビエト軍がたぶん既にすぐ、航空機を特定の位置に引いていき、分解(全ての乗客と乗務員を誘拐する事、なんと馬鹿げた事が[B.S])し、たぶん沈め、そしてたぶん海面下で破壊した航空機の残骸を自分自身が捜しているという策略を彼らが行っている間、私たちの捜索努力は実際、遊ばれていたシャレード(ジェスチャーゲームの一種)にすぎなかったのです。」(CIA報告/共和党局員論文の65ページ)

注：007便の救出：KAL007便の語られなかった物語とその生存者の137-138ページから

ソビエト軍は私たちの同盟軍の努力をそらし、混乱させるために偽のピンガーを使用したのだと言うピオッティ司令官の主張を裏付ける事と同様、ソビエトのこの特定の船舶[けいこう丸 3号]に対する嫌がらせに対しての興味をそそのる裏付けを見るために、私たちはイズベスチヤのシリーズで発表されて、そして1991年5月31日の「ワールドワイドイシュー」で引用されたソビエトの水兵の報告を調べる事ができるのです。

「私は思い出します。日本の搜索船のけいこう丸3号(またはかいこう丸3号)がミルチンクの隣に錨を下ろした時、一瞬の緊張がありました。ミルチンクはケーブルを通して制御される、自動推進の水中搜索機械を持っていました。ミルチンクからの、その機械の作戦範囲は、もし私が間違っていないなら、2-2.5キロメートルです・・・その時、機動作戦部隊司令官のシドロフ艦隊司令官は命令を下しました—素早くサハリン島配置のトロール船に四爪錨(機雷と船をつないでいるケーブルまたはホーサを切断する装置)を備え付け、トロール船をけいこう丸の横の定位置に送る様に。ミルチンクがその機械を海中に下げるや否や、そのトロール船は日本の制御ケーブルを切断する事になっていたのです・・・それがどんなに役立ったか理解してください。これは全く強盗行為でした! けいこう丸を救った唯一の物は、私たちの海軍が仕掛けた偽のピンガーでした。日本人はその無線標識信号のおびき寄せる物を捕え、間違った区域に行ってしまったのです。」

それでソビエト軍は、安全にKAL007便の生存者と共に姿をくらまただけではなく、首尾よくアメリカ軍—その湾に率いられた軍を引き留め、ソビエトの指導的な引き揚げ船のミハイル・ミルチンクが持ち出していたその「残骸」は策略以外の何物でもなかったという事をアメリカ軍に見させず、理解させなかったのです。

バート・シュロスバーグ